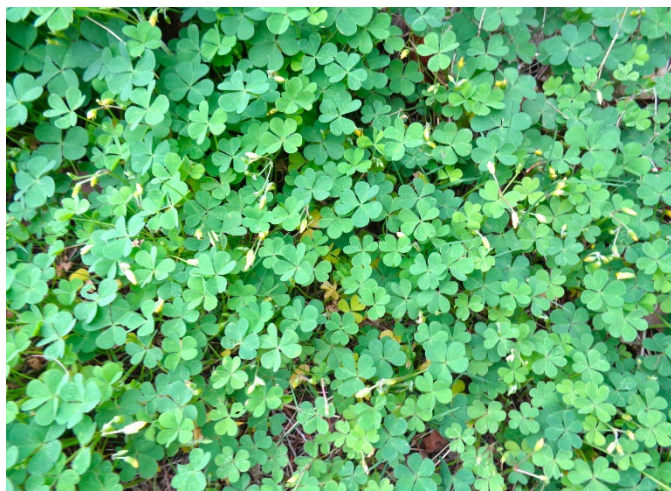


園のおたより



第 1 号

令和 7 年 4 月

埼玉大学教育学部附属幼稚園

だんごむし 3

園長 関 由起子

ご入園、ご進級、おめでとうございます。今年度は27名の新入園児をお迎えし、全園児76名でスタートいたしました。新入園のこどもたちは、まだまだ不安や緊張でいっぱいのことと思います。けれども少しずつ園生活にも慣れ、自分の好きな遊びを見つけはじめています。進級したこどもたちは、全力で好きな遊びに没頭しはじめました。教職員一同、こどもたちの一日一日を大切に、この1年を過ごしてまいりたいと思います。保護者の皆様、何卒よろしくお願いいたします。

4月になり、急に園庭が明るくなりました。新しい芝生が芽吹き、色とりどりの花が咲き、こどもたちも元気に園庭を走り回っております。そして、春といえば「啓蟄」、冬ごもりをしていた虫たちが、一斉に土の中から出てきました。そして幼稚園での一番人気の虫はやっぱり“だんごむし”です。石やレンガをどけると、そこにはのんびりと動き、少し触るとくるっと丸まる、そして少し時間が立つと動き出すけれど、容易に捕まえることが出来るだんごむし。だんごむしは幼児の心を捉えて離さない、虫界のヒーローです。

けれども、私は虫がちょっと苦手です。本園に赴任してからこどもたちに虫の魅力を教えてもらい、だんごむし1匹なら大丈夫になりました。けれど大量となると、まだ怖くて逃げ回ってしまいます。そのような私の気持ちを知っているこどもたちは、大量のだんごむしをコップに入れ、私に襲いかかってきます。そのたびに、「あー、春がきたなあ」と思わずに入られません。

2組のAさんは、だんごむしが大好きです。去年の春、たくさんのだんごむしを手のひらに乗せて毎日登園していました。登園時、私は園児と手を繋いで教室に向かうことがあるのですが、Aさんの手の中にだんごむしがたくさんいることがわかったと、私は手を引っ込め、手を繋がずにAさんと一緒に教室まで歩いていました。そのような日々を過ごし、ある秋の日の朝、Aさんが「園長先生、もう大丈夫だよ」と手のひらを差し出してくれたのです。Aさんの言葉を聞き、猛反省するとともに、私と手を繋げないことをずっと気にしてくれていたこと、私を安心させるために空の手のひらを見せてくれたことに感謝し、私にすばらしいやさしさを見せてくれたことに感動いたしました。

今年の4月も、こどもたちの「だんごむし」という声が聞こえない日はありません。だんごむしと戯れながら、こどもたちはどんなやさしさ、かしこさ、たくましさを育んでいくのか、とても楽しみです。



「時間」のこと

副園長 小谷 宜路

以前、この幼稚園を卒園した人が、小学校6年生になったタイミングで、幼稚園や小学校の生活についてのことをインタビューする機会がありました。かつて担任として関わった人たちに少し時を経てから話を聞くことができたのは、とても興味深いことでした。そのインタビュー項目の1つとして、幼稚園の生活と小学校での生活の違いはどこに感じるかを尋ねました。その時の答えとして最も多かったものは「時間」でした。幼稚園生活では自分で決めて遊べる時間がたくさんあったけれど、小学校生活では決まっている時間が多くて自由が少ないという回答でした。「こどもたちにとっての時間とは？」が、私にとっての大きな課題意識となり、今でもよく考えているテーマです。

ある年、私は1組（3歳児クラス）の担任となりました。直前の3月まで3組（5歳児クラス）の担任をし、卒園を見送った後、新たに入園してきた人との出会いを迎えました。入園したばかりの1組と関わる中で、卒園間際の3組との生活を思い返すと、何だかとても忙しく過ごしてしまったのではないかという思いが強くなりました。卒園する前にできるだけの体験をしてほしいという期待が多くなっていたのかも知れない、こどもたちが年長児として活躍していく姿を過度に喜びすぎていたのかも知れないという振り返りでした。幼児期にとっての本来の時間は、この1組の人が過ごすゆったりとした流れなのではないかとも感じました。その後、3組の担任をする時には、特に時間の流れを意識することを心がけるようになりました。

「時間」をテーマにしたある絵本では、次のように書かれています。

「かぎりある時間をどのようにすごすかということは、だれかが決めてくれることではなく、それぞれの人が決めなくてはならないことです。」「自分が満足できるような時間のつかいかたを考えられるのは、自分だけなのです。」「『君にとっての時間とは何か？』の答えは『君の生き方そのものだ』ということになるのです。」

この絵本の問いのように、3歳だから、5歳だから、こどもだからということを超えて、こども時代でも大人になった後でも、人にとっての時間の感じ方はどのようなものか、そのことを大切にしていきたいと思います。

* 絵本「みんなそれぞれ 心の時間」一川誠・文 吉野晃希男・絵 福音館書店



クラスだより



1 くみ

「今の『楽しい』のこと」

1組での一年が始まって、こどもたちは毎日いろいろな表情で登園しています。初めて会った時には見られなかったような表情を見ることができて嬉しく思っています。新しい環境に好奇心をもってふれる姿もあります。とっても遊びが好きな人たちです。

今の遊びのことを少し紹介します。砂場では、山を作って高くしたり、水を流したりしています。手で思いきり砂を運ぶうちに、山が大きくなる様子が面白いようです。また、木製の皿に砂を入れて食べ物やジュースに見立てて作っています。身近にある花や葉を飾ったりすることも楽しいようです。芝生では、フラフープを転がしたり、フープを消防車に見立てたりしています。誰かの「あっちが火事です」という言葉や、指をさす方へ数人が走っていき消火活動をしています。園庭を広く使って思いきり走る表情から「楽しい」が表れています。ブランコや登り棒やたいこ橋は、興味のある人がいろいろなやり方で試しています。「のぼる」動きをする中で、どのような景色が見えているのでしょうか。そして2組さんや3組さんの遊びに加わる姿もあります。土の模様がついた顔で「川の工事楽しかったね」と満足そうに話してくれます。幼稚園の「楽しい」を、それぞれが見つけています。じっくり味わう人、いろいろにふれてみる人、誰かと一緒にしたい人・・・いろいろな楽しみ方で思いきり遊ぶ姿に、こちらも楽しくなります。これからどんな遊びに興味をもっていくのでしょうか。

降園前には、みんなと一緒にひとときを過ごしています。歌を歌ったり、興味に合うものや季節を感じられるような絵本や紙芝居を見たりしています。「せんせい！チューリップ歌おうよ」「ちょうちょが歌いたい」「うらうらうらの（ようちえんのうた）やつがいい」と毎日たくさんのリクエストがあります。ひとときを過ごす中で、この時間も楽しいと思えたり、ホッと一息ついたりしながら、心を通わせる大切な時間になりそうです。





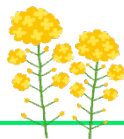
2 くみ

「新しい場所、新しい人」

26 人の 2 組の生活が始まりました。2 組の保育室や園庭の様々な遊具を使うことを楽しみに、進んで遊びに向かっていく姿があります。

新しい環境で遊ぶ中では、自然といくつかの場所でこどもたちが集まって過ごすことが多くありました。特に砂場には自然と人が集まっています。それぞれが自分の遊びを進めていく中でも、近くに友達や先生の姿を感じながら過ごす姿がありました。5～6人で段ボールを枠にして、その中に砂を入れて大きなケーキを作っていると、水も入れないと硬くならないことを話す人がいました。そして実際にじょうろで水を入れ、手で押して固めていきました。すると、一人の手にじょうろの水少ししかかり、「冷たい！」とびっくりしました。それを聞いた周りの人たちが、じょうろから注がれる水に手をかざして、同じように「冷たい！」と言いました。そして顔を見合って笑い合いました。同じようにしてみたり、同じことで笑ったりすることで「楽しいな」という気持ちを分かち合えた、そんなひとときでした。その他にも、生活の様々な場面で顔を見て笑い合う場面がたくさんあります。同じ気持ちなんだねと感じて嬉しく思いながら生活している姿があります。

心地よい春の季節は、これからのどんな楽しいことがあるのか楽しみな気持ちと同時に、環境の変化に対する不安や緊張も感じる時期です。ある日の朝のテラスでのことです。元気に登園してきたある人が「先生、お着替え手伝ってくれたら、一緒に遊んであげるよ」と話してくれました。新しい場所で、新しい人と、どのように関係を築いていくのか、大人がこどもたちにとってどんな存在なのか、ということを感じさせられる言葉でした。今年一年間、一緒にいろいろな「楽しいな」の気持ちを共にしていきたいと思います。





3 くみ

「偶然からの面白さ」



3組になり、1か月程が経ちました。初めは、新しい保育室や担任に緊張した様子もありましたが、生活が進むにつれて3組になった嬉しさを感じながら過ごす姿が見られるようになりました。園庭では思いっきり体を動かしたり、水や泥にダイナミックに関わったりしながら遊ぶ姿が多くあります。

ある日、築山近くの坂道でバケツに入った水を流すと、偶然、昨年度の3組が掘った名残りを水が流れていきました。それを近くで見ていた人が「川の工事をしよう」と同じところから水を流し始め、それに気づいた友達が集まってきました。水を流していると、近くで別の友達がいっていたレストランの目の前まで水が迫ってきました。「絶対にレストランを濡らさないで」と言っている友達の言葉を聞くと、「川を深くしたらいいんだよ」とレストランの近くを一生懸命に掘り始め、何とか水を食い止めようとそれぞれが考えながら工事を進めます。「早くしないと濡れちゃうよ」とみんなで声をかけ合いながら川を掘り続けていきますが、次第にレストランに水が近づいていきました。自分の思いを大切にしながら工事してくれる友達の姿を見て、レストランの店主さんは「じゃあ、僕がお引越すよ」と水が来ないところにレストランを移動することを思いつきました。レストランが移動したことで、川はどんどん長くなっていきました。川が大きくなってくると、工事車両の手押し車や工事の人が簡単に川を渡れるようにログを渡して橋の工事も始まり、さらに人が集まり大工事になっていきました。いろいろな友達が集まると、流れてくる水をチョコレートに見立てて泥を集める人、川を掘っている時に出てきたいろいろな石を集めて石博物館を開く人、川だから船も流れるかも、といろいろな葉っぱを流してみてもどんな船が良いか試してみる人など、一つの場の中にそれぞれの楽しさが混ざり合い、新しい面白さを見つけながらその場で遊ぶことにより楽しさを感じているようでした。

川工事は偶然水が流れたことから始まり、友達がやっている面白そうなことを周りの友達を感じ取ってその場に集まり、面白いがどんどん広がっていきました。偶然見つけた面白さや「こんなことをしたい」というそれぞれの思いを受け止めながら、一人一人が感じた面白いにじっくりと関わられるよう支えていきたいと思えます。